# 高島の地震の史料

高島市内には、琵琶湖の西岸平野部に南北に続く「琵琶湖西岸断層」や、今津町水坂峠から朽木・京都市街へと続く「花折断層」と呼ばれる断層が存在します。近年では、過去の断層の活動状況を知るための調査が活発に行われ、いつごろの時代に、どの断層が動いて大きな地震になったのかなどが、次第に明らかになりつつあります。

また、地震が起こったことや、その被害状況は、当時の公的な記録や日記類などに多く記されることから、高島市内に残る史料にも地震にかかわる記事を見つけることができます。ここではそのいくつかを紹介してみましょう。

高島市域に大きな被害をもたらした地震としてよく知られているのが、寛文2年（1662）5月1日に起こった大地震です。この地震は、近年の活断層の調査から、花折断層北部および若狭湾から三方五湖へ向かってのびる日向断層が活動したことによって引き起こされたものと考えられています。

市内での被害は、花折断層に近い朽木地域で大きかったようで、朽木宮前坊の邇々杵神社に残る棟札（建物を建てる際、工事の由緒・年月日・建築者などを記して棟木に打ちつけた札）には、このときの地震で、神社・塔・寺・家屋敷が残らず倒壊したため、その2年後の寛文4年（1664）に領主の朽木智綱が神社の再建を命じたことが記されています。また、別の史料からは、同じ寛文の地震で、朽木野尻にあった朽木陣屋が倒壊し、隠居していた第十七代領主・朽木宣綱が、崩れてきた梁の下敷きになって亡くなったことが分かります。

寛文2年の地震によって社殿が倒壊したことを記す邇々杵神社の棟札

またその他の市内の被害としては、勝野に残る大溝藩関係の史料から、大溝領内で倒壊家屋が1、022軒、死者が30人余りだったことや、今津町酒波の日置神社の史料から、大地震で山崩れがあり、多くの死者が出たことが分かります。このような記録から、この寛文2年の大地震は、市内の広い範囲に大きな被害をもたらしたことが想像されています。

寛文地震以外にも、『高嶋郡誌』によると文政2年（1819）6月12日に大きな地震があり、マキノ町海津・西浜や今津町今津、そして勝野などで、土蔵の壁が落ち、寺院の門や鐘楼が倒れるなどの被害があったことが記されています。なお、この時の地震では、対岸の彦根市でも大きな揺れがあったらしく、彦根藩主・井伊家に伝わる史料には、彦根城の一部が損壊したことなども記されています。

（文化財課）

朽木宮前坊の邇々杵神社

## 編集者のつぶやき

天気に恵まれ、田植え日和となった5月15日、日本の棚田百選「畑の棚田」で棚田オーナーによる田植え作業が行われました。表紙はその1コマ。オーナーは都市部からの家族連れが多く、一生懸命苗を植えるお父さんの傍ら泥だらけで遊ぶ子どもたちや、子どもをおんぶしながら田植えする力強いお母さんの姿も。自分たちで汗をかいて植えたお米はきっとおいしく感じるはず。秋が楽しみですね。　（広報担当S）

広報たかしま 平成23年6月号 No.137
■発行／高島市　編集／政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.shiga.jp
t-info@city.takashima.shiga.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
PRINTED WITH SOY INK 大豆インクを使用しています。